

笑う男

若狭陽太

男は人を笑わせる才があったので

いつも下らない冗談を言つて みんなそれを聞いて腹を抱えて笑つた

彼は人を笑わせているとき 自分が世界でいちばん幸福に思えた

笑つた以上は 誰も彼に踏み込むことはできない

男は高い塀の上 深い堀のほとり 厚い装甲の向こうで 防衛戦をすることにした

男は全ての人を笑わせたかつた

男は気付いていた 笑わせたいなら 相手と同じ景色を見なければ

男は学んだ 働いた 飲んだ 転んだ 見た 聞いた 味わつた

みんなは笑つた 日常を忘れた 頬は弛緩した 硬直した 腰は砕けた

彼の目の前で笑う人々の 脳の奥が弾ける様子は彼を虜にした

彼は絶えず分かち合い 線を引き 同じだけ腹を抱えて

誰の訪問も受けない不落の城の上

誰も触れない深海の骨の下で

彼は笑っていない時間の過ごし方を忘れていた

彼はふと 面白さについて考えを巡らせた

相手が知っていることを 相手が結びつけられなかった事物から結びつけるとき ひとは笑うのだと考えていた

だが もしも 自らを曝け出すことが一番面白いのだとしたら

人が戸棚に閉まって開示しないことを 世界と結びつけられたら きつと面白いに違いない

そう思つて 裸で芸をすることにした

人は日常を掻き乱される緊張感と 知っているものが結びつく安堵の虜になつた